
精霊王と魔王様

水連 呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊王と魔王様

【Nコード】

N1315V

【作者名】

水連 呉羽

【あらすじ】

少女、悠里は少女を助けて死んでしまった。目が覚めたら赤ちゃんなっていった。そこは精霊や龍さらには子供が男だけという異世界で……。え？女の子は？女の子いないと子供できないじゃん！。それはお話の中で？※悠里の体も初めは男の子の体です……。そんな少女がのちの冷酷非道の魔王様となる少年を普通の魔王様にするために（・・・結局魔王様にはなるんかい。）頑張る
転生したおかげでチートとなった少女をのちの魔王様となる少年が溺愛する話です

何を書こうとしていたのか分からなくなりました。すみません

転生するまえ見たのは・・・

・・・・・・

キンコンカンコン

学校が終わったことを示す鐘が鳴った。

「さてとお母さんに頼まれた買い物でもして帰ろうと」

そう言いながら鞆に藩やノートを入れていく少女。

入れ終わったのか鞆を持って教室から出ていく。

校門の前までやってきたとき校門の影に隠れていたのか横を通り過ぎようとした時に少女が飛び出してきた。

「ひどいよ、悠里《ゆうり》。ずっと待ってたのに置いて帰ろうとするなんて」

泣きながらそれでも怒りながら言ってきた。

「ごめん、ごめん。今日はちょっと頼まれたものがあって・・・」

苦笑いしながら悠里が言うと

「頼まれたもの？ 女の子に告白されてたのかと思った・・・・・・・・」

「いくらなんでも一日に二回も告白されないだろ・・・」

呆れ半分でそう呟いた・・・。

「甘い！ 甘いのよ！ あなたは！」

ビシッと悠里を指さしながら

「あなたは女の子に人気なのよ？ 女の子たちは、周りに男がいると
いうのに男には興味がなくて代わりにあなたのことが好きになって
しまったのよ！ 女の子が女の子にモテるって一体どういうことよ！
？」

「しかたないだろう？ なぜ私のことを好きになるのかも分かんない

んだから」

そう、この少女は、女の子なのに女の子に好かれてしまう体質なのだ。

少女と買い物と一緒にすることにした悠里は世間話をしながら歩いている

「やっぱりビールはいいなあ」

たまに腐った発言をする少女。何を隠そうこの少女は腐女子なのだ。その少女のおかげで少々腐り始めている悠里。

本人は腐ってなどいないといっているが……。

店の前まで来たとき悠里は友達と店の中に入った

「さてお母さんに頼まれたのは……」

頼まれたものを見つけに店の中を歩き回る。

そうしているうちに買い物物を済ませたのか店の中から出てきた。

店から出てきた後、家に帰るのか歩き出した。

5分ほど歩いただろうか

「ちよっと自動販売機でジュース買ってくるね！ここでまってよ？動いていたら絶対許さないんだから！」

と言って交差点の奥にある自動販売機のところに歩いて行った。しばらくすると少女がジュースを2本もって走ってきた。

「あんなに走ってあいつドジなのに大丈夫かな？」

案の定、少女は交差点の真ん中で転倒してしまった。すると向こうから一台の車が走ってきた。

「あのトラック。あいつに気づいていないのか？」

そう言っている間にもトラックはスピードを落とさずに少女に近づいている。

悠里は少女を助けようと思ったのか走り少女のところまで走っている。

少女とトラックがぶつかりそうになるその前に少女を道路の隅にやろうと押し返した後、自分も隅にどうかとして後ろを振り返ると、トラックが目の前に来ていた運転手をみると驚いたような表情をしていた。手には携帯電話・・・。

「（なるほど。電話してたのか・・・。通りで気付かないはずだ。私を見て驚くぐらいなら電話なんてしないでください。）」

そう心の中言っている間にもトラックとぶつかった。

少女が「悠里！」と叫んでいる中、悠里はのんきに考え事をしていた。

「（ああこれは死んでしまうのかな？それにしてもあんまり痛くはなかったなあ。それにまだ、お母さんに頼まれたの届けていないのに・・・）」

少女が無事なのを確認して目を閉じて行った。

最後に見えたのは・・・いろいろな色をした光でした

転生するまえ見たのは・・・（後書き）

。 やつと書き始めました。いろいろ考えていたらこんな時間に・・・

まあがんばってかいたんで読んでいってください！

精霊様・・・名前が決まりました。

温かいものに包まれる感触がした。

しばらくすると頭が引っ張られる感触がした。
あまりの痛さに気を失ってしまった。

「・・・さん。・・・は・・・な？」

「も・・・で・・・い・・・かい？」

「・・・だ？・・・で・・・だ・・・？」

男の人の声・・・女の人の声。そして子供の声。
恐る恐る目をあけてみる。

男の人と女の人が椅子に座りながら話している。
子供たちがボールを投げたりして遊んでいる。

わたし死んだよね？なんで生きてるの？そんなことより・・・

「あう？」

ここはどこ？

その声に気付いたのか男の人と女の人はこちらを見て近づいてくる。

え？なになんで近づいてくるんですか？

「あなた。気付いたみたいよ？」

「ああ。やっと生まれてきた」

生まれてきた？だれが？もしかして私のことですか？

「あう？」

「おお！俺は君のお父さんだよ」

「そして私がお母さん。あなたは私から生まれてきたの」

・・・もしかして、じゃなく私、転生したみたいです。

お父さんがボールで遊んでいる子供たちに声を上げる。

声に反応した子供たちは遊んでいたボールを手を持ちながら近づいてくる。

「きづいたの？」

「名前は？」

「目の色は何色？」

などなどたくさんさんの質問をしている。

子供たちは全員で5人。それも5人とも男の子でした。
5人？多いですね。それに男の子って・・・。

「ああこの子の名前はな・・・」

お父さんが私の体を持ち上げる。

それまで考えていたことを一旦止める。

・・・それより名前ですね。

違う名前だとたぶん勘違いをしそうです。

どうか似たような名前でありますように・・・。

「ユーリ・・・ユーリフィアラ・クラシスト。字はユーリ^{アザナ}」

・・・ユーリ？ユーリ発音が違うけど似ています。
これなら大丈夫そうです。

「漆黒の髪と瞳の双黒。ということは、僕の瞳と君の髪を受け継いでいるね・・・。どう成長するか楽しみだね」

「どのくらいの魔力を持っているのかしら」

私は漆黒の髪と瞳・双黒をみてこれからどうなるか考えていました。

精霊様・・・名前が決まりました。（後書き）

またいろいろ考えていたら時間がかかってしまいました。
今度はもっと早く打てるように頑張ります。

精霊様・・・はじめて山に入りました1

名前が決まって5年がたちました。

その間、分かったことがあります。

どうやらここは魔界のようです。

ここには天界、魔界そして人界と呼ばれる世界があります。

名前通り、天界には、天使族がいて、魔界には魔族がいます。

まあ人界には言わなくても分かりますよね？人間がいます。

天帝陛下・・・天界の王様と魔王陛下・・・魔界の王様は子供に王位を譲る世襲制ではありません。

いわゆる選ばれた者が王様になるようです。

誰が選ぶって？精霊長です。

人界は世襲制ですね。噂では魔族つまり私たちを恐れて何かをしようとしているらしいです。まあそれは置いて・・・。

精霊には、下級精霊、中級精霊、上級精霊、そして7大精霊長がいます。

精霊は基本寿命が長いのですが、契約を結んだ子・・・精霊に愛されし子がいると、その人が死ぬと精霊もその人を追うように消えてしまうそうです。

それから前の精霊長がなくなってしまうとすぐに次の精霊長が選ばれます。

そして精霊長に愛されし子がいたらその人が王様になります。

その時精霊長に愛されし子が2人以上いると魔力量の多い方が王様になります。

愛されし子がいなかったらどうなるかというと、上級精霊の中の愛されし子から精霊長が選びだして王になります。ちなみに、今の天帝陛下は光、魔王陛下は、闇の精霊長に愛されし子です。

3界（天界、魔界、人界をまとめた呼び方）には階級制があり、上から王、セブンノブレッセ（7大貴族）、上級貴族、中級貴族、下級貴族、平民（農民含む）と商人同じで、娼館（身を売るところ）で働く人があります。

うちは農民ですね。

精霊に愛されし子は上級貴族と同じ扱いをされます。

魔術師もいますが一流の魔術師と素人の中級精霊に愛されし子が闘って互角です。

このように精霊の力は強いわけですから狙われますね。暴走する可能性もあるわけです。

なのでそれを防ぐためにも魔術師の素質がある子や精霊に愛されし子を保護して訓練させる場所があるんです。その名前は『ゲニウスの党』そこは貴族が干渉できない不可侵領域所になっています。

貴族というのはいいやつのいれば自分だけが儲かろうと王様に賄賂をしたりします。

はじめて町に行ったときに気付いたのですが、10歳までの子はすべて男の子でした。

女よりも男の方が体力があるからだそうです。

子供には生まれた時から10歳まで性別の精霊がつきます。それから精霊が生活を見て10歳になる時、変化が起これば女の子に起き

なければそのまま男の子として成長していきます。

また12歳になると体が女や男として機能し始めるので、いらない子供を捨ててお金をする子供もいます。捨てられた子供は名前を奪われて娼館生きです。男も女も娼館に入れます。

3界には5歳がたと魔力をはかる義務があります。私も5歳になったので魔力をはからなければいけません。

それから黒い髪と瞳ですが黒い髪はいても黒い瞳の子はいなく逆の場合でも見かけませんでした。

双黒というのは珍しいようです。

以上のことが私のわかったことです。

「ユーリ、頼みたいものがあるんだけどいいかしら？」

考えていたことを引っ込めて、特に何もすることがなかった私はいよいよ。と返事する。

「じゃあ、肉と野菜を買ってきてくれる？」

「肉と野菜ね。分かった。どのくらい？」

「・・・・どこで買うかどのくらいかを聞いて外に出る。」

町の露店・・・商店街に出るとおばさんやおじさん、それから子供たち。

ワイワイと盛り上がっていた。

子供たちは私に気付くと笑いながら走って近づいてくる。

一人の子供が

「今日はどうしたの？何を買いに来たの？」

「肉と野菜だよ。そうそうこの店ってどこにあるかわかる？」

店の名前が書かれている紙を見せながら聞く。

「ああ、この店なら、こっちにあるよ」

私の手を引きながら歩いていく。

歩いているとおばちゃんやおじさんたちが私に挨拶をしてくれる。
そんなことを繰り返していると、店に着きました。

「あの・・・お肉と、野菜を買いに来ました」

「ああ、どんなのだい？」

「この紙に書いてあるものをください」

紙を渡して行った。

お金を渡して家に帰ろうとしたとした時ぶつかりました。

ええあの貴族に・・・むかつきますね。

ぶつかった貴族の馬車は私を無視して走っていきます。

「大丈夫かい？」

近くにいたおばさんが手当てをしてくれました。

精霊様・・・はじめて山に入りました2

手当てをしてくれたおばさんにお礼を言って帰ろうとしました。
家の裏に山がありその前に『入るな危険』の文字がありました。

不思議に思いつつ帰ろうとしましたが何かが気になり山の中に入りました。

・・・ピーピッピ・・・ガルル・・・ガサガサ・・・

鳥の鳴き声に獣の鳴き声そして草が動く音

「なんだろうここ・・・」

目の前には切られた気がまっすぐ刺さっていました。

「お墓みたいだな・・・」

「もういいや。家に帰ろう」

お墓みたいなものから離れようとした時、うわーーーーーという声が聞こえてきました。

無視してもよかったのですがどうしても無視できなかったのです。
そのまま声のした方に走って行きました。

魔獣がいたら魔術か精霊術つまり精霊に力を借りるわけですが、私は精霊に愛されし子ではありませんので精霊術は使えません。となると魔術ですが、魔力の発動ができないので、魔術は使えません。その代わりなんとかしようと考えた末、魔法が使えるようになりました。

魔術は魔法陣や言葉で使うのですか、魔法は文字で使います。

考えているうちに襲われている男の子とその男の子に襲いかかろうとする魔獣を見つけました。

『カマイタチ』そうつぶやいたと同時に魔獣は後ろに倒れました。

カマイタチとは風が刃のようになって切りかかるものです。

「魔獣は倒れた。さて、男の子は・・・」

男の子を見ると倒れていた。

魔力が切れているみたいです。

ところどころに傷があったので『治癒』で直しておきました

まずは魔力の回復ですね・・・回復アイテムはいろいろあるんですが、魔水しかありません。

この魔水は飲まないといけないのですが、気を失っているので口移ししかありません。

まあ気を失っているのでこれは事故ということにしましょう

私は魔水を口に含み少年の口をふさいだ。

少しずつ少しずつ魔水を送り込む。

「ん・・・」

いきなりヌメッとした何かが入りこんでくる。

それが少年の舌と気付くのにあまり時間はかからなかった。

最初は驚いたが仕方ないと思った。

「んあ・・・ふぐ・・・」

私の舌と少年の口が絡められる。

しばらくすると少年の目が開かれ、少年は私から離れる。

少年の目は紅い瞳そして髪は銀色。顔は将来美形になりそうなくらい顔が整っている。

「大丈夫？どこも痛くない？」

「うん。大丈夫。僕、魔獣に襲われて・・・あれ？魔獣どうしたんですか？」

魔獣の体を指さす。

「死んでるの？」

「いや？死んでないよ。ただ、怪我をしてる」

「そんなことより、これを飲んでおいて？」

液体の入った瓶を渡す。

「これは？」

「魔水だよ」

「魔水？聞いたことがないよ？」

「聞いたことはないだろうな。それは私が作ったものだよ。魔力が高いものでもそれを飲めば回復できる。お前にそれを飲ませた。」

「僕に？僕には魔力はないはずだよ」

「いや、魔力はあるはずだよ。魔力があると思ってみて」

少年は目を閉じた。

すると、光りが少年の体を包み込むように広がっていく。

「紅い光りと黒い光り・・・火の精霊と闇の精霊か・・・」

火と闇の精霊に愛される子・・・それにこの光は・・・強いな。
上級はあるかもしれない。

少年は目をあける。

「なにこれ？光ってる・・・」

「精霊の光だよ。何色かで何の精霊に愛されているかわかるの」

「そうなんだ・・・」

「で、これからどうするの？」

「どうするって言われても、僕には帰る家がない・・・」

「ならゲニウスの塔に行ってみて？私も付いて行ってあげるから」

「うん。あの、名前は・・・」

「うん？私の名前はユーリフィアラ・クラシスト。みんなからはユーリって呼ばれているよ？君の名前はなんていうの？」

「シャルナラード・・・あ！違う僕には名前はないだった」

名前がない？ということは捨てられる所だった？

「なら、シャル・・・シャルレコードっていうのはどうかな？」

「え？」

「いやならいいんだよ？でもないと困るし・・・」

「イヤなんかじゃない。ありがとう」

「さて、ゲニウスの塔に行く前にまずはお母さんに頼まれたもの渡しに行きたいんだけどいいかな？」

「うん、いいよ」

「じゃあいってきますか」

精霊様・・・塔に行きました

「お母さん、しばらく帰ってこないから
といって家を出ると待っていたシャルに

「行こうか」

手をつないで歩いた

「ここからゲニウスの塔まで3日ぐらいあるから、まずは武器を
買おう」

「なんで武器？」

「人さらいが来るから・・・。それにまた魔獣が来るかも知れない
から」

武器屋に來ると

「なんでもいいよ？選んでおいで」

「え？でも・・・」

「いいから・・・盗賊に襲われたらどうするの？」
といって武器を選ばせる。

「これにする・・・」

と言って見せてきたのは剣。

「じゃあ私は、これにしようかな？」

白いマントが目に入ったのでそれを買う。

「じゃあ、その剣を貸して？」

剣を持ち『武器強化』と『火の加護』をかける

「何をしたの？」

「武器の強化と火の加護をつけたんだ」

「火の加護？なんで火なの？」

「シャルが火の精霊に愛されし子だから」

「はい。できたよ」

私のマントも同じように強化をする

「さあ行こうか」

3日たった時、塔が見えた。

「ゲニウスの塔・・・精霊に愛されし子や魔術師の素質がある子が保護されるところ・・・」

「僕は精霊に愛されし子なんだよね？ユーリ」

「そうだよ。きっと保護してくれるはず」

受付まで行って誰かを呼ぶ。

「すみません。保護してほしいんですけど」

受付の奥の扉があく

「なんだ。こっちは忙しいんだ。」

一人の青年が出てくる。

「精霊に愛されし子がいたので連れてきたんです。保護してくれま
すよね？」

「そいつが精霊に愛されし子か？」

「はい。シャル、あの魔力を見せてあげて」

「うん」

シャルは目を閉じ集中をしだす

するとまた紅い光りと黒い光りがシャルの体を包み込むようにして

表しだす。

「火と闇の精霊に愛されし子・・・それにこの光は上位精霊か？」

「これでいいですよね？」

「もういいのユーリ？」

「うん、いいよ。ありがとう」

笑ってお礼を言う。

「シャルだったか？ここの住むのか？」

「シャルじゃない。本当の名前はシャルレクード。まあ家がないからここに住むよ？」

「そうか・・・おまえもか？」

「私？私はいつかお父さんに捨てられるから。お母さんを幸せにしてあげたいので、まだここには暮らしません」

「ここで暮さないの？」

「ごめんね？でもしばらくはここににいるから。しばらくここにいてもいいですか？」

「ちよっと待っとけよ」

受付の扉を青年が開ける。

その先には男性と女性がいちゃついている。舌を絡め、いろいろとしている。

「なにをやっているんだろ？」

シャルそこは聞くな

「ああ、愛し合ってるんだよ」

「愛し合ってる？」

「好きってこと」

「なら僕もしなきゃいけないの？」

「え？今何て言った？」

「なら僕もしなきゃいけないの？」

「聞くんが、何をしようとしてるんだ？」

「あれ・・・」

シャルが指さしているのは愛し合っている2人。

「しなくてもいいんだよ。それにシャルのはたぶん恋愛じゃないでしょ？ 私は男だよ。まだ・・・」

「どうして？」

「恋愛は異性として好きということだから。私が10歳になって女になってシャルがそれでも好きというなら、それは恋愛だよ」

「なら、それまで・・・待ってるから」

精霊様・・・塔に行きました2

「頭が痛い・・・」

どうしてこうなったんだろう。

「ユーリ。好きだよ・・・」

そう昨日からシャルが告白みたいに言ってくるのです。

「シャル、向こうでラオリークが呼んでるぞ」

そう言ってきたのは昨日の青年、カムマと呼ばれているそうです。

「シャル、行っておいで待っててあげるから」

しぶしぶといったように向こうに歩いていく。

「お前も大変だな」

「何がですか」

「シャルだよ。告白されていたじゃないか」

「あれは本気じゃないんですよ。まあ本気じゃなくても私は構わないですが」

「ははは、あいつも苦労するな・・・お前と話す時俺、にらまれるのに」

最後の言葉は聞こえていないらしく

「お前、鈍感だよな。あいつがかわいそうになってきた」

「鈍感？何のことです？」

「いや、なんでもない。気にするな」

「あ、はい。分かりました」

「ユーリ」

後ろから抱きつかれバランスを崩しそうになった私は、カルマに抱きつく。

「シャル、いきなり抱きつかないで」

「ごめん」

シャルはうつむいたまま謝る。

「ごめんね？カムマ。いきなり抱きついたりして」

「いや、大丈夫だ」

シャルがにらんでくる以外はな・・・

また最後の言葉は聞こえて来ない。

何を言っているんだろうと思いつつもシャルに何の用だったのかを聞く。

「えっとね、魔力をはかって、それから質を調べて、なんの精霊から愛されているのか調べたんだ」

「どうだった？」

カルマもそれに興味があるらしくシャルのほうをじっと見ている。

「魔力が800万で、質が赤、精霊が闇と火？だったよ」

普通の人が1万の魔力だから魔力も多いことが分かる。質は水晶で測るのだが、魔力を流すと透明から様々な色に変化する。ちなみに上から黒、赤、青、黄色、緑、茶色、淡いピンク、白といったようになっている。

シャルは2番目の質の高さなのでかなりの質の良さが分かる。

ちなみに王様たちは黒らしいです。大体の人が茶色らしいのでとてもすごいですね。

と、なるとシャルものすごく強いんじゃないか・・・もしかしたら魔王になるかもしれない。

今の魔王陛下は90歳のお爺さんらしいです。いつなくなってもおかしくありません。眞王は43歳でまだまだ元気なので眞王は殺されることのない限りまだまだ大丈夫です。

私は、まだはかっていないのでわかりません。

「すごいね、シャル。これからもがんばってね。」

「頑張ったら僕と結婚してくれる？」

どうしてそうなるんだろう。結婚？まあ子供だから仕方ない。

「さあ？分からない。でも頑張ればそうなるかもね？」

「僕、立派になるから！」

なんかシャルが立派な人になったら結婚しないといけないようになってるのは気のせいでしょうか？

気のせいだと思いたい。シャルもまだまだ子供だし、これから恋もするよ。いつか忘れるよね。

「うん。楽しみに待ってるよ」

「シャル。私ね、明日には家に帰るから」

お父さんが帰ってきてると大変だしね。

「え？帰るの？」

「うん。ごめんね？」

「ここにいてもいいんだぞ」

カルマが苦笑いしながらいう。

「いいえ。でも12歳になると私は娼館に売られることになると思うので、それまでお母さんに恩返しをしたいんです。お母さんだけです。お父さんはお金に目がくらんでしまっ……」

だからまだここでは暮らせません。

「そうか。いつでもここに来いよ？シャルも待ってるから」

「シャル、立派になってね？」

「立派になって、ユーリが安心して暮らせるようになったら必ず向かいに行くから」

だからそれまで待っててね？と涙をためながらいうシャル。

「あはは。楽しみだな」

苦笑いをしながら、そうこ答えた。

「では、帰りますね？ シャル・・・」

こっちにおいでと言うと素直に来てくれる。

「これあげる」

シャルに渡したのは銀色の指輪。

「これは？」

「わたしが作った指輪・・・シャルが立派になってくれますように
って願いを込めて昨日作ったの。それから・・・」

魔水のカバンの中から取り出してシャルに手渡す。

「これって魔水だね？」

「そうだよ。魔力が切れた時に飲むと回復できるから」

「ちょ、ちょっと待て。今、魔水と言わなかったか」

カルマがあわてるようにして言う

「うん。言っただけど・・・」

それがどうしたの？ と言う前にカルマが

「魔水と言えば飲むだけで回復できるとても貴重なやつじゃないか。
とても高価で1つでも金板5枚だぞ？」

「金板5枚？」

日本で言う銅貨が1円、銅板が10円、銀貨が100円、銀板が
1000円、金貨が1万、金板が10万するらしい。金板5枚は5
0万だ。瓶一つで50万って高いです。

「どこで手に入れたんだ？ いうかどこで買った？」

「買うも何も、自分で作っているんですが」

たぶん、ぶつかった貴族にお詫びとして魔水を上げてそれから広ま
ったのですかね？ と言えばさらにびっくりして

「お前が作ったのか？ どうやって？」

「作り方は教えられませんが・・・あれは適当に作ったものですよ
？ 性能はシャルが持っているのが一番いいものです」

「そうか」

「よかったら魔水1ついりますか？」

「いいのか？俺お金なんてないけど」

「いいんですよ。その代わりシャルのことをよろしくお願いします」

「そんなことでいいのか？」

こくりとうなずいて魔水を渡す。

「ユーリ、かならず迎えに行くから。まっててね」

「楽しみに待ってるよ」

じゃあねと手を振ってゲニウスの塔を出って行った。

精霊様・・・精霊長に会いました

「ここはどこでしょう？」

気付いたら知らない道に来ていました。

「さて、歩きまわったら余計分からなくなってしまうな」
どうしたもんだろう？元の道を歩いていけばいいか・

・・・リ・・・ユ・・・

なんだろう？まあ気にしなくてもいいですよね？

・・・ユー・・・ユーリ・・・！

「ん？誰か呼んだ？」

後ろを見えるが誰もいない。

見たるのは・・・木と草・

「なんだったんだろ？」

気にしつつも歩いてきた道を歩いていく。

「ユーリ様！」

ん？と後ろを見ても誰もいない・・・

空耳？思っ歩き出す。

「上を向いて」

上？と思いつつも見てみる。

バサバサという音が聞こえてくる。

一瞬だけ強い風が吹く。

「なに！？」

青色の鳥が飛んでいた。

そう、青い鳥・・・

そう聞くと普通じゃんとかおもいそうだが、目の前にいる鳥は普通ではない。

普通の鳥の何倍、何十倍もある青い鳥。

「何？」

鳥はその声を合図に小さくなっている。
小鳥サイズになったのか、上から鳥が下りてくる。

「ユーリ様・・・気付いて下さりありがとうございました。」
鳥は少年のような声で話す。

話した？え？魔獣は話さないし、聖獣も話さない。
となると、後は精霊だけだが・・・
一応の確認のために聞いておく。

「あの、違ったらすみません。精霊ですか？」
「はい。私は水の精霊長をしています。名はウィンディーネと申します」

そのままかい！と叫んでしまいそうになる口を押さえつつ冷静になる。

少し落ち着いたところで・・・

「で？私に何か用ですか？」

「敬語を使わなくても結構です。使われる者では私はありません」

「あの・・・人違いでは・・・」

精霊にそれも精霊長に敬語を使われる覚えはない。

そう伝えると・・・

「いいえ！絶対にあなただ間違えありません！」

いやだから・・・覚えが・・・

「異世界から転生してきましたよね？」

ありました・・・

で、でもそれが敬語につながるなんて・・・

「本来、こちらで生まれるはずだったあなた様が力を使って異世界に飛んだんですよ」

「そうなんですか？」

「そう、精霊王として生まれるはずでした・・・しかし、あなたは異世界へと行ってしまわれた。そして私たち精霊は気付いたのです。私の世話をしたければ見つけ出してみると言っているのだと」

私そんなこと思っていないません・・・妄想ですか？

「それから、私たち精霊はがんばってあなた様を探しました。5年前あなた様の強い力を感じ、もしかしたらと一軒の家に行きました。そして見つけたのです。双黒のあなた様を・・・」

「で？わたしがその双黒だって？」

「はい、間違いありません」

「転生してきたのは認めるよ？でもさ精霊王というのは・・・」

「高い魔力を持っているのに発動するのは難しいでしょう？そして、魔法？というのを使っているにしろ。それは精霊王の力です。あの男の子を助けるときに使っているにしろ。それで確信が持てました」

にっこりとしながら言うので私も笑うことしかできません。

「精霊王ということは認める。で？私は何をすればいいの？」

「何もしなくてもいいですよ？ただ幸せになって下されば。それだけで私たち精霊は力が安定し強くなりますから。私は力不足ですがユーリ様の世話係をさせていただきます」

せ、世話係？

「そんなのしなくていいから！ひとりでもできるよ」

「では、私は何を？」

仕事を与えればいいのか？

「なら、いろいろ教えて？それから話し相手になって？」

「話し相手？。申し訳ありませんがそれは・・・」

「できない？なら別にいいんだよ？あなたは帰っても・・・」

「で、ですが・・・」

「ふーん、ならいいよ。ばいばい」

「お待ちください！分かりました・・・。話し相手になりましたよ
う」

にやりと私は笑ってしまったような気がする

「そう？なら敬語もなしね？それからウインって呼んでいい？」

「お好きなように呼びください。ですが敬語は・・・」

「ウイン？」

ニッコリと笑いながら言う。

「ビクッもう好きなように・・・任せる・・・」

「それでいいんだよ」

「さて、私5歳になったから、魔力をはからないといけないんだけど・・・、魔力高いんでしょう？だから少しにしようと思って・・・どのくらいがいいと思う？」

「うーん・・・平民ぐらいに設定でいいんじゃない？」

「そうだね」

『魔力設定』 淡いピンク・・・普通の人より少なめに

「これでいい？」

一応確認してOKをもらった

「これでお父さんに捨てられる・・・」

「捨てられてもいいの？」

「いいんだよ。お父さんはお金に目がくらんでいるから。高いと利用されるんだよ・・・」

「そう」

「さて、行くよ？」

地面にいたウインが私の肩に乗る

「なんでこの姿なの？」

「だってでかいと近づけないし」

苦笑しながら歩いていく。

世間話をしていると家に着いた

精霊様・・・お兄様の過保護発言とお父様の暴力

ゲニウスの塔から帰って1週間が経ちました。

私を産んでからのお母様は徐々にやつれていきました。けど、お母様はとても私に優しくしてくれました。

お兄様3人も、意地悪はしてきますが、とても良くしてくれます。あとの2人は・・・。

問題はお父様です。何故か知りませんが、お金に目がくらみ始めました。

魔術師の素質を持つ子や精霊に愛されし子を売ると大金になるらしい。

お兄様二人がお父様によってどこかに売られました。どこにいるかも分かりません。

後の3人のお兄様は、いつ売られるかもわかりません。

おそらく、娼館売られるだろうと言っています。娼館というのは体を売る人が働いているところです。私知っている娼館は女の人か働いている人かと思ってきましたから、お兄ちゃんが働けるのかと調べていました。だって店に来るのは男ですよ？と疑問に思って調べた結果、そういう趣味の人も少なくないんだとか・・・。

娼館に売られるのに何でそんなに冷静でいられるのと聞いたことがあります。

「だって、抵抗しても、仕方ないだろう？売られても、逃げるから大丈夫だよ。それに逃げたら、母さんや兄弟がひどい目にあっ

まうかもしれないだろ？父さんに売られて、困ったらたまずお兄ちゃん達の名前を呼びな？」

「そうだよ。それにここに居たって利用されるだけだしね。あのバカ親父はもうだめだ。可愛いこの子を置いていくことになるけど。でも必ず強くなって見せるから」

「それに可愛い子がいじめられたらだめだしね。まあ母さんには幸せになってもらいたかったけど・・・ユーリが困ったら必ずかけつけるから」

どんだけ過保護なんでしょうこの3人のお兄様たち。

いいえこの3人だけではありませんでした。売られていった二人の兄たちもです。

売られた2人のうち1人は魔術師の素質があるからといって売られ、もう1人は精霊に愛されし子ということで売られて行きました。

二人のお兄様が私に言った言葉はなんとも過保護な言葉でした。

「お兄ちゃんはユーリの味方だからな？絶対に強くなって偉くなつて迎えに行くから。俺は、魔術師の素質があるらしいから行くけど。何かあったら叫べよ？」

「まだ10歳になってないから妹かもしれないが弟でも妹でもユーリはユーリだから。貴族の家に行くけど、脅し・・・説得して、偉くなって高い地位までいって、ユーリが住みやすいようにしてあげる」

でした。

過保護ですよ？脅してとか言いそうになってましたよね？確かにまだ妹か弟かわかりませんよ？

ブラコンかシスコンか分かりませんよ？

私が言いたいのはなぜこんなに過保護かということなんですがね・・・

・・。

困ったことに上の5人は黒いんですよ。私の前ではかくしているようですが近所の子供たちから恐れられたり憧れたりしています。

「ユーリ。今日はお前の魔力測定だろ？」

「大丈夫だからな？俺たちが売られるまで守ってやるから」

「心配しなくても俺たちがそばにいてやるから」

過保護なお兄様たちに心配されながらもお父様が帰ってくるまで待ちました。

何故かって魔力をはかる時は保護者がいないといけないんですよ。

いわゆる保証人みたいな？

お母様はやつれてしまっているのでだめだし、お兄様たちはまだ成人していないのでだめなのでお父様しかだめなんですよ。

それに魔力は測らなくても分かっているので意味ないですよ。だって普通に設定してるから

—ユーリ。なんか来たよ。たぶんユーリのお父さんじゃないかな？—
—ありがとう—

「大丈夫だよ。心配しないでお兄様にっこりと笑う。」

「こんなに可愛いのに売るなんて何を考えてるんだろうね？」

「そうだな。ユーリが傷つく前に殺すか？」

「じゃあさ、風で突き刺すか、水で窒息死させるか、火で焼きつくすか？どれにする？」

「どれでもいいんじゃない？どれにしろ死ぬだろう？」
物騒です。お兄様……。人殺しをしないでください。あなたたちが言うとは本当するかもしれないと思ってしまいます。

「おい、帰ったぞ！」

バン！という風に扉を開けたお父様。

大丈夫かな？あの扉……

「おい、ユーリ！」

後で直すしかないか……

「ユーリ！！」

ビックといったように反応してしました。

「何をしている。俺が呼んだんだから早くしろよ！」

と言われ殴られました。蹴られました。

蹴られながらお兄様たちを見ると……。はい……。お父様を鬼のような形相でにらんでいました。そんなに睨んでたらいくらなんでも気づかれるだろう！

お兄様の1人と目が合い大丈夫という風にお父様にばれないように微笑むと残りの二人に教えて睨むのをやめてもらった。

「おい、聞いていたのか？」

蹴りながら、怒鳴りつけるように言ってくる

「ごめんなさい。聞いています」

私はおびえたように声を出す。

「そうかならない」

そう言い捨てて最後に強く蹴って

「ほら、立て。魔力をはかりにいくぞ」

精霊様・・・魔力を測定に行きます

お父様に連れられてきたのは魔界の中にある12都市の中でも小さい都市・・サールントにあるハルグール。

ハルグールは魔力の量測定や魔力の質をはかったり、戸籍を登録したりするところです。

5歳時には魔力の測定は義務になっていますが、一般的にお金を払わなければいけません銀貨5枚・・つまり500円ですね。

「すみません。魔力の測定をしにきました」

「ああ、はい。そちらのお子さんでよろしかったでしょうか？」

「はい、ユーリフィアラークラシストです。ユーリ行って来い！」

受付のお姉さんについていって1つの部屋に着いた。

「では、まずは量を調べますね。机の上に置いてある水晶に手を置いて魔力を流して下さい」

言われた通りに手を置き魔力を流す。

「はい、薄いピンクですね・・・」

お姉さんは手に持っていた紙に何かを書き込むと

「ではこちらについてきて下さい」

隣の部屋に入ると前にいた部屋と同じように水晶が置いてあった。

「では、さっきと同じように魔力を流して下さい。魔力の質を調べます」

え？質？まずい。忘れてた魔力量しかしていない

「ちなみにこれは、誰にも知られることはありません。記録することはありませんので気楽にやってください。私は誰にも言わないように訓練されていますので」

―本当らしいよ？嘘はないみたい・・・気楽にやってみたら？―
―ならいいかもしれないね・・・―

言われたとおりに魔力を流す

するとどうだろう・・・
水晶が粉々になった。

ちょっと待って！粉々ってやばくない？私のせい？
恐る恐るお姉さんを見てみる。

「ユーリさんは素晴らしい質の持ち主ですね」

え？粉々になったのに？

「この水晶は割れることによって質を調べるんですよ。この方法は都市によってそれぞれですので混乱されるのは無理はありません」

なんだそうかよかった。

「ユーリさんのは粉々になっていますのでものすごくいい質を持っていますね」

ああやってしまった……。質も普通に設定していればよかった

「で？普通の人はどうなんですか？」

「普通なら10個ぐらいに割れますね・・・」
10個・・・そして私のはバラバラ・・・

「訓練していけばもったいい質になるかもしれませんよ？頑張ってください」

「ではこれで・・・」

私はお父さんの場所に戻る

お姉さんは書類をお父さんに渡す

おそらく魔力量などが書かれているものを渡したんだろう

「ありがとうございました」

「くそが！お前は普通か！兄たちは優秀だったのに」

蹴られた・・・殴られた・・・けどあんまり痛くはない・・・

「お前が10歳になったら娼館に売る。それまで感謝しながら生きろ」

そして強く蹴ってまたどこかへ消えた・・・。

「大丈夫か？今手当てするからな？」

お父さんに蹴られ腕が折れていました。

お兄様たちに手当てをしてもらい家の近くの川に行きました。

どうしてでしょう・・・？お父さんは憎む相手なのにそれよりも哀れに思ってしまう・・・
どうしてでしょう・・・？いつから父はお金に執着するようになったのでしょうか？

「・・・ウイン。10歳になると売られる。しかし今逃げたらお母様に被害が出る。ならさギリギリまでいようか？売られる直前に逃げだそう・・・」

青い小鳥が肩に乗る・・・

「ユーリ様のお心のままに・・・」

ウインは敬語だったが・・・まあいいでしょと思いつながらそれを聞く・・・。

さてこれからどうするか・・・まずは10歳になるまでの準備で
すね・・・

武器の強化とか・・・いろいろ・・・楽しそうになりました・・・

精霊様・・・お兄様とお別れです

決意を決めてから2年がたち7歳になりました・・・・・・・・

お兄様が娼館に売られるそうです。お兄様は3人ですよ。出て行ったら私が1人になってしまいます・・・

「ユーリ。これが最後じゃないからな？」

「絶対に会いに来てやるから！」

「いつか、必ず兄弟そろって会おうな？」

お別れすると聞いて泣いた私を慰めてくれました。

「お兄様。分かりました・・・じゃあせめてこれとこれを持っていってください」

3人のお兄様に手渡したのは、3つの魔水が入った瓶と色とりどりのペンダント・・・

「これは魔水・・・・。魔力が少なくなったときに飲んで？・・・それからペンダント・・・私が作ったペンダントだから。魔力が込められてるよ。強化しておいたから・・・。私がいるってことをこれで思い出してね？」

魔水はどこで作っているのかと質問もあるようですがそれは教えられませんか？たえお兄様でもね？

簡単には説明できますよ？おおざっぱに説明しますとね・・・

魔水はたくさんの薬草や調合、そして私の魔力から作られています。

街の本屋で『調合』という本を見つけてから興味がわき、遊び心で作っていたら魔水ができました。

いやあ、最初はびっくりしましたよ。魔力の回復薬なんて作ってる覚えがありませんでしたから・・・

他にもいろいろありますよ？たとえば動物に化ける薬とかいろいろ作ってしまいました・・・

たまに猫に化けたり鳥に化けたりしてました。けど効果がすぐに切れてしまったので効果が続くようにしました。1日効果が続くようになったので大成功ですね・・・

「ペンダントの色が違うが・・・」

「その色はね、私が考えたお兄様の色だよ・・・。青は冷静。赤は情熱。黄色は元氣。2人のお兄様に渡したのは、緑でさわやか。白で優しさ・・・ね？そっくりでしょ？」

目に涙を浮かべながら笑った。

「そうだな・・・確かに俺たちにそっくりだ。青が俺、シーク。赤がセーカ。黄色がソーキ兄。緑が、レクヤ兄。白が、ライナ兄・・・お前がどこにしようとながっているから」

「それにユーリの双黒は、めったにいないもんな」

「たとえ妹だったとしても、双黒はあまりいないから見つけるのが簡単だな」

双黒。黒を持つというところが珍しいのにお母さんとお父さんの色を受け継いで双黒となった。お父さんもお母さんも普通の人より魔力の量は多かったみたいなので、同じ色ならたくさん持っていると、お

父様は期待していたのだろう。

そういいながらペンダントを首に下げ、魔水を懐に入れる。
懐に入れて大丈夫か？と思ったが心配はなかった。袋が付いていたから・・・

「わたしは10歳になったら山に入って生活する。難しいと思うよ？」

そこまで私を見つけないでもいいんだよ？思いながら言葉を発する。

「ユーリが山の中にいたとしても、必ず見つけるから」

「そうそう。それに俺たちは別々のところに売られるんだぜ？」

「けどな必ず合流してみせる。そして見つけ出して見せる。幸せになれ」

扉の向こうからガタガタと歩いてくる音がする。

「シーク、セーカ、ソーキ。もういいだろ。そろそろ行くぞ」

そう言って入ってきたのはお父様。

「お前たちは、これから娼館に売る。名前を捨てろ」

娼館に売られる者はただの道具・・・名前はいらない・・・必要な
い・・・

それは私がお兄様の名前を呼べないということと同じことだった・・・

私はお兄様の顔を見る。

心配するなと3人のお兄様の顔が言っている・・・

けどね・心配ぐらいさせてもらってもいいんじゃない？

家族が別れるんだよ？普通、心配しない方がおかしいんじゃない？

お兄様がお父さんの後についていく

なにをできない・・・せめてと魔水とペンダントを渡した。

お兄様が私に望んでいるのが幸せなら幸せになって見せよう。

自分の思い通りに生きて見せる。逃げなきゃいけないからお母さんに被害が行かないようにしないといけないから。10歳まではおとなしく・・・

お父さん、怖くはないけど、哀れには思うよ？お金に執着し家族を売ろうなんてただのバカですね？お金を稼ぐ方法なんて、まだたくさんあったのに・・・

でも娼館に売られたらお父様と呼べなくなりますね。・・・バカと言え方がいいのですよね？

家族のつながりはないのでですから敬意は払わなくてもいいですよ？

育ててくれたことには感謝します。それ以外はどうでもいいですね・

・
・
・

「お父様、今までありがとうございました」

お父様とお兄様が出て行った扉に向かって

微笑みながらそう言った・・・

精霊様・・・お兄様とお別れです（後書き）

あれ、なんかシリアスみたいになっちゃった。シリアスにはしませんよ？

精霊様・・・逃走しました

10歳になったのでお父様に売られてしまいます。

なので逃走しようと思います。もちろんお母さんに迷惑がかからないように・・・

「さて、お父様？いきましようか・・・」

近くで待っているお父様に問いかける。

「ああ、それからお前の名前はもうない・・・これで親子でも何でもない他人だ・・・」

「別にいらない・・・名前なんて」

「なあ！？お前は！それに言葉が・・・」

お父様に隠していた剣を向ける・・・

「お前は何がしたい？俺を殺すか？俺を殺す前にあいつを殺すぞ」

「あいつ？誰のこと？それから言葉はこれが素」

「隠していたのか・・・まあいい・・・お前の母さんだ」

「？なぜそこで母さんが出てくるんだ？」

「分からないか？知っているぞ？お前が母さんに親孝行したいと思っ
ていることはな・・・」

きっとほかの兄弟もそうだったのだろう？そしてお前だけが行動に出たというわけだ・

さあ・俺を殺せ！お前の母さんを殺してやる！・・・どうした殺せないのか？

・・・怖いのか？フフハハハハハハハハ！それもそうだろうな。お前はろくに魔術が使えないからな

それに対して俺は魔術が使える・・・速さが違うからな・・・・どちらが先に死ぬかお前も分かっているんだろ？」

ニタニタとこちらを笑いながら言ってくるバカ・・・

気持ち悪い。そんな顔で笑わないでよ・・・

「・・・うるさいよ・私はお前を殺そうとしているんじゃない・
・ただききたいだけだ
・・・・なぜ、そんなに金に執着する？なぜ兄さんたちを売った？」

お父様いやバカはいまだに笑っている・・・

「お金に執着して何が悪い？この世は金がすべてだ！お金がなければ食べ物も買えない・・・
金を持っているやつは上から下のモノを見ていればいい・・・お金を持っているこそが偉いんだ
そのためなら何だってやってやるさ。人を売ることだってなんだってやるさ！」

「・・・へえ、そこまで言うならたくさんのお金持ってみる？ほら・・・」

バカに渡したのはお金が入った袋・・・金板が百枚ぐらい入っている・・・1000万ぐらい
でもこの世界からしたら百億ぐらいの価値がある・・・
ちなみに魔水売って金を稼いだ・・・

「お前・・・これだけのお金をどうやって」
中身を見ながら問いかけるバカ・・・

「・・・どうだっていいだろう？少なくともあんたに答える義務はない」

「な！俺は父親だぞ！聞く義務がある」

「父親？誰が？私にはそんなのいないよ？」

「俺がお前の父親だ！さあ・・・答えろ！」

「あれえ？さっき親子でも何でもない他人だって言ってたのは誰かな？」

それに焦っているバカ・・・

「あのさ、その金やるから、出て行かせてよ・・・それから乱暴しないでくれる？それが守れるならくれてやってもいいよ？」

ニヤリと笑いながら言う。

それをみたのかおびえたように言うバカ・・・

「ああここから出て行ってもいい。母さんにも乱暴しない？」

楽に返事したな

内心出ていけばこの金は俺のモノだし勝手にやってもいいと思ってるのかと思い

「言っとくけど・・・変なことしたらすぐに駆けつけるから・・・」
そしたらに死んじゃうよ?と笑いながら言った・・・

「わ、わかった。言う通りにするよ」
「そう? ならいいや・・・言ったこと忘れないでね?」

じゃあねと手を振りながら出て行った・・・

「・・・いくよ・・・ウイン・・・」

「いいの? お母さんに乱暴するかもしれないよ?」

「ああ。その点は大丈夫・・・脅し・・・じゃなかった・・・説得してきたから・・・」

「・・・ユーリ、今・・・脅してって言おうとしてなかった?」

「・・・気のせいだよ。これを言えば・・・頭のいいウインなら分かるよね?」

その時のユーリの顔は言ったらお仕置きだよって言っていたとウインが語ったらしい・・・

「さて、じゃあ魔の森に行こうか・・・」
「そうだね」

ウィンが私の肩に乗ったのを確認して歩き出した。

魔の森は危険のところ・・・龍や凶暴な魔獣が住んでいる・・・
はたして生き残ることができるのか？

・・・そんな不安を持ちながらもユーリは魔の森へと歩いて行った

精霊様・・・魔の森に入りました

暗い森・・・

どこからか聞こえてくる動物、魔獣の声・・・

葉と葉が掠りあつて聞こえる音・・・

「ここが魔の森ね・・・」

「ちなみにこちら辺ならまだ弱い魔獣ばかり・・・中途半端に強い奴が奥まで行くと帰ってこれないほど強い魔獣がいるよ・・・

まあ普通の奴が龍に会ったら・・・まず死ぬよ・・・」

「いやーしかし、魔獣に会ってないんだけど？」

「あー、たぶんユーリが本能で強いと感じて出てこないんじゃない？
人より敏感なんだよ封印しても気配でわかるのかもしれないね・・・
・・・」

・・・。。。。。。。

「じゃあさ私を攻撃してくる奴以外は何もしないと教えてやればいいのかな？」

「・・・いいと思うよ？魔法をするの？」

「そうそう。だってここまでの逆さにさびしいじゃん・・・」

「確かにね・・・」

まずは魔獣に言葉を分からせるために・・・ちがうか私が理解してしゃべればいいんだ・・・

ええーっと『魔獣語翻訳』に『広範囲拡声器魔の森指定』

「あー魔獣の皆さん？私はゆーりと言います。危害を加える奴以外は何もしないので気にしないで気軽に近づいてきていいよ・・・聞こえるのは私のせいだから気にしないでねー」

「これでいいかな？」

「いいけど・・・その言葉と・・・なに！？その広範囲拡声器って」

「え？知らないの？拡声器・・・」

「知ってるわけないでしょう！」

「えっとね、言葉は魔獣に言葉をしゃべってもらったらいろいろと大変だし・・・だから私が理解できるようにしたの・・・それから拡声器は前世の世界にあった道具で声を増幅するために用いられる器具のこと・・・これを使って魔の森全体にわたしのことが聞こえるようにしたんだよ」

「便利なものだなー」

「で？こいつら何？」

目の前にいるのは黒っぽい色をした魔獣で爪がものすごく尖っている熊っぽい・・・

「で？何の用かな？」

まだ手は出してこないで笑って言う・・・

「うるせー、ここら一帯は俺の縄張りだ。用があるなら俺を倒して

いくんだな・・・」

・・・。

「ねえ・・・ウイン・・・魔獣って気配に敏感なんだよね？」

「ごめん・・・言い忘れてた・・・気配に敏感でも自分の力を以上に美化しているやつがいるんだ・・・」

たぶんそれがそのうちの一体・・・」

「なるほど・・・力のナルシスト・・・」

「無視してんじゃねー」

大きな声でわめく熊っぽい魔獣・・・

「・・・ごめんね？・・・えーと倒せばいいんですね？」

「おまえに俺が倒せるのか？俺に挑んだやつはすべて殺したんだぜ？」

「あーはいはい。強いですね・・・」

棒読みで褒めて挑発する。ほんとうに強い奴なら乗らないはず・・・。

「おまえ！なめてんのか！？」

そういいながら襲いかかってくる熊っぽい魔獣・・・

「あーあ。挑発にのっちゃってるし・・・」

肩の上で呟くウインを無視して私は魔法をかける

『地獄の業火』黒い炎が熊っぽい魔獣を囲むようにして上がる

焼けたのは草の部分だけ・・・あとは何も残らない・・・骨さえも・・・

「たく・・・攻撃してこなければ何もしないと言ったのに・・・」

「あの・・・」

恐る恐るといったように木の陰から出てきたのはウサギみたいな魔獣・・・

うさぎとは違ってしっぽが長い・・・そして黒だ・・・。

「なあに？」

笑いながら話す・・・

「えーとありがとうございました」

ペコリと音が鳴りそうなぐらい頭を下げるウサギっぽい魔獣

「やばい・・・」

「あの・・・どうかしましたか？」

頭をかしげる姿はとてもかわいい・・・

「かわいいよー何この可愛い魔獣・・・ペットとしてほしいんだけど・・・」

・・・

「あ、あの！落ち着いて下さい・・・」

「は！ごめんね？で？なに？」

「あの魔獣をやっつけてくれてありがとうございます」

「ん？あの魔獣って熊みたいなの魔獣のこと？」

「は、はい。実は・・・あの魔獣は1年前にここにやってきて縄張りをのっとたんですよ」

本当は、私の縄張りでした・・・

しかしあの魔獣は私の仲間を食べて行きました・・・

「そうか・・・やっぱあの魔獣はこのボスじゃなかったか・・・
・・・で？あなたがこのボスだったんだね？」

「え！？なんでわかったんだすか？」

「あー・・・そこ言わなきゃだめ？」

「当たり前です！教えてください・・・」

「こいつのおかげだよ・・・」

肩に乗っているウインを下におろす

「この小鳥が？」

「僕はウインディーネ。一応水の精霊長をしているよ・・・」

「ユーリ僕に何をさせるつもり？」

「いやあ魔法のこと言ってもいいのかな？」

「別にいいと思うよ。命令すれば言うこと聞くとと思う・・・」

「誰にも言わないって約束してくれる？」

「はい。約束します・・・」

「じつはね？私、精霊王なんだ・・・」

「・・・え？」

「だから精霊王・・・」

「・・・え？」

「だあかあら精霊王！」

「えええええ！本当ですか？」

「そうそう本当だよ。」

「これまでもご無礼申し訳ございませんでした・・・」

「別にいいよ？で？いつまでその姿でいるつもり？」

「何のことですか？私にはさっぱり・・・」

「その姿、偽りの姿でしょ？・・・あなたは力の大きい魔獣・・・」

下手したら龍かも知れない・・・」

「さすがユーリ。気づいてたんだね？」

うれしそうに笑うウイン・・・

「当たり前・・・というのは冗談で・・・魔の森の入る前、魔法をかけておいたんだよ・・・」

力が分かる魔法をね・・・」

なるほどーとうなずいているウイン・・・

「確かにこの姿は本来の私の姿ではございません。しかしお見せることもできません。私は生まれてまだ3年しかたっていないので力が足りないのです・・・」

力が足りないね・・・

「ウイン・・・魔獣と契約できたっけ？」

「本来はできないけど・・・ユーリは魂が精霊王だもんねー、うんできるよ！」

「じゃあさ、契約しようか？」

視線をウインから魔獣に向ける・・・

上目遣いでもものすごく愛らしい・・・

「さてとじゃあこちらにおいて？契約するから」

契約は簡単・・・魔力を流し名前を付けるか教えてもらおう・・・

「まずは魔力を流しまーす・・・それから名前は・・・って名前ある？」

「あ！いいえ・・・名前を呼ぶ必要がなかったので・・・」

「うーん。なら・・・ルナ・・・月の女神の名前から取ってる・・・」

「うわーいい名前ですね・・・」

「さて、私と契約したから力は格段に強くなっているはずだよ？」
「ほんとだ・・・体の奥から温かいものがあふれてくる・・・」
「本来の姿は見せなくてもいいよ・・・見せたければ見せてもいいけど・・・」

私はその姿好きだよ？・・・」

「・・・ならこのままの姿でいいです・・・」

「ふーん？ いいの？」

「はい・・・あの私もお供してもいいですか？」

「何言ってるの？ 私といると危ないよ？」

「それでもです。ユーリ様は私を守ります！」

「あー、ありがとう？ でもルナがそんなことしなくてもいいんだよ？」

「いいえ・・・力をいただいた以上お守りします！ させてください・・・」

「はぁ分かったよ・・・」

「ありがとうございます」

にっこりと笑うルナはとてもかわいい

「ああーもう！ かわいいなー！」

ルナをとって頬ずりする・・・

精霊様・・・魔の森に入りました2

「・・・さて、そろそろ行くか・・・」

ユーリは歩き出した

「ユーリ、まあだ歩くの？」

「あーもうちょっと？」

「もうちょっとって・・・ユーリ、もうそろそろ夕方だよ？」

「そうだね。でもなんかある気がするんだ・・・」

そう言って歩いていくこと10分・・・

着いたところは、魔の森では普通の所だった・・・あるものを除いては・・・

あるものとは木の近くにある草といってもいいほどの葉草で普通の人ならば通り過ぎていただろう・・・

しかし・・・例外もある。

おそらく魔薬師・・・毒草や薬草を研究している人かユーリにしか分からないだろう・・・
それほど草と変わりはない

皆さん、ユーリが説明した町の本屋の話は覚えているだろうか・・・

その街の本屋はいろいろなものを置いていることで有名だった・・・
絵本や調理本、魔術のことが書いてある魔術本、そして調合・・・
何故かは知らないが調合の本を買ったら・・・薬草や毒草が書かれて
いる書物も一緒に手渡された

そこにとってもレアな薬草として書いてあったのが今目の前にある薬草だ・・・

ちなみに魔水の原料でもある・・・
ユーリは本に書いてある絵を具現化したものだから本物よりは効果が薄れる

「これで魔水の効果が上がるかもしれないよ？・・・そうだな・・・
・魔力の底上げぐらいになるかもしれない・・・まあ作ってみよう
！」

「なに出かけよう！みたいなノリで言ってるんですか！！」
「そうそう。そう簡単にできるわけじゃないじゃん！」

魔力の底上げは難しい・・・

一度魔力が切れるぐらいまでちなみに切れると植物状態？になるそうです・・・

そこから回復したら魔力の量が上がりたり質が良くなったりするんですよ・・・格段に・・・

しかし一歩間違えたら・・・魔力が切れて植物状態になるので滅多にしないんですよ・・・

植物状態になったら・・・寿命になるまで永遠に目を覚まさない・・・

確かずっと前に・・・奇跡的に目を覚ましたとあるが、一度だけだ・・・

そう魔力を回復を一気に回復させる薬を作ったというだけでもすごいのにだ・・・

ちなみに魔力の回復は早くても1日はかかる、遅くても4週間・・・

「ん？たぶん2年あれば作れると思うよ？」

案外、魔水も簡単だったし・・・そうつぶやくユーリにウィンとルナは絶句した。

それも面白いくらいに絶句した・・・

「ユーリ様？あの・・・ちなみに魔水ってどのくらいでできたんですか？」

恐る恐るしかし、好奇心で聞いてきたルナ・・・
肩の上でルナと同じように好奇心で聞き耳を立てる・・・

「うーん。最初のが3週間・・・？で一番新しいのが・・・10か月だね・・・」

ルナとウィンは固まった・・・

しかし適当に作っていたのだから当たり前だ・・・

いろいろな薬草を混ぜて調合し、魔水ができたのだから奇跡としか言いようがない・・・

「まあ、それはおいといてレコヴァー草を取ろう」

目の前にあるのはたくさんの薬草や毒草のことについて書かれていた中でも超レアな薬草・・・

魔薬師にとってはとてもうれしいこと・・・

「しかし・・・こんな所に生えてたなんて・・・」

「本当だよな・・・」

「不思議です・・・」

「でもさ・・・直感で来てなかったら・・・」

レコヴァー草に一生出会えなかったな・・・そうつぶやいた

「ユーリ様は運も素晴らしいんですね」

そう腕の中にいるルナは感心した・・・

精霊様・・・魔の森に入りました3

「ルナ・・・ユーリは何を怒ってるのかわかるか？」

「さあ？分かりませんね・・・」

「あーもう！なんで、こんなに魔獣が出てくるんだよ！」

200歩歩いたら必ず出てくる魔獣たち・・・しかし弱いものばかりだ・・・

「ユーリ様・・・なぜそんなに怒っていらっしゃるのですか？」

「どうしたもこうしたも・・・200歩歩いたら出てくる・・・それからルナ・・・私のことを・・・姉さまと言ってみて？」

「ユーリ姉さま・・・これでいいですか？」

「姉さま・・・ルナが可愛いよー。ルナ・・・今日から私のことは姉さまと呼びなさい！」

つぶやき、ルナの方に首を向けて命令した・・・

「ユーリ様？」

「姉さま・・・」

「ユーリ様・・・」

「姉さま・・・」

「・・・はあ、ユーリ姉さま・・・」

「うん！」

ユーリとルナの言いあい？が続き、結局折れたルナ・・・

「それより、魔獣のことはいいのか？」

突然ウインが話した。

「は！そうだった！……なんで魔獣が200歩歩くと襲いかかってくるのかな？」

「……そうですね。もしかしたら、人間だと思って襲ってきてるのかも……」

「いや、それはないだろう……。ユーリは魔法を使って警告した・

・
それに魔獣がユーリの気配に気付かないわけがない……。・
魔獣は強い気配には敏感だ……。・獣だからな……。・本能なんだろう・

・
「でもそうなるとおかしくありません？」

「そうだね……。どうしてかな？」

「まあ、一応はまだ大丈夫だから様子を見よう……。・」

ウインの提案に賛同したルナとユーリ・

「しかし、本当にしつこいな……。・」

ルナの滑らかな毛を撫でながらつぶやいた

「本当ですね……。最初に現れた魔獣は弱かったですが……。徐々に強くなってきています」

最初に現れた魔獣は戦闘が素人でも勝てただろう……。・

しかし、徐々に戦闘をしたことがないと勝てないぐらいに強くなってきた……。・

「ウイン……。魔龍以外の龍に会いに行くぞ……。・」

「魔龍以外の龍……。どうして？」

・
「この森の頂点は龍……。しかし魔龍は魔王でも勝てるかわからない・

・
まあ……。ウインがいるから大丈夫だけどね……。・

しかし・・・魔龍に聞く必要はない

あくまで魔獣に襲われないようにお願いをするだけだからね・・・」

「ああ。そういうことか・・・」

「え？なにがです？意味がわからないんですが・・・」

話の内容についていけず戸惑っている

「この魔の森の頂点に君臨しているのは・・・魔龍だけど・・・その下に7大龍がいる・・・」

その7大龍に気に入られさえすれば・・・この森の魔獣には襲われない」

「魔獣にとって龍は主のようなものだからね・・・」

その主のお気に入り・・・客には手を出せないってわけ」

なるほどつと納得しているルナを目の端に入れながらウインに尋ねる

「ここから近い龍はどれ？」

「えーと、水龍だな・・・ここから1km離れた洞窟の奥に泉があってそこで暮らしているらしい・・・」

「1kmね・・・だいたい1500歩かな？」

「ということはあと・・・7回、魔獣に遭遇しますね」

7回・・・結構あるなと心の中で呟きながら洞窟の方に向かって歩いて行った

しばらく歩いたところで・・・大きな岩が見えた・・・

「これが洞窟？どう見ても岩にしか見えないんだが・・・」

「情報にはここだと書いてある・・・」

「何かヒントがあるかもしれません・・・探してみましょう」

岩の周りを探索し始めるルナとユーリとウイン・・・はたから見れば精霊、人間・・・魔界に住んでるから魔族だが・・・魔獣・・・

姿が魔獣、だが正体は知らない・・・
3種とも違うのでおかしく見える・・・

「あ！何かありました！」

声を上げるルナ・・・

「え？あった？」

「本当か？」

声を上げたルナに驚くウィンとユーリだがルナの加えてきたものに目を向ける

「えーと？なにになに・・・」

ルナの加えてきたものそれは何か書かれた古い布・・・
それをユーリは、手にとり広げた

「我は水を司る精霊より力を賜った水龍なり・・・

我に会いたければ・・・自分の力を示せ・・・

すべての生命の中に含まれる聖なるものを・・・我に示せ・・・

我は水龍・・・精霊を除いて我に命令することは許されぬ・・・」

「・・・って書いてあるの？私には読めない・・・」

「わたしにもわかりません・・・」

「精霊語だ。ルナは読めなくて当然だが、ユーリは魔法を使えば読

めると思うが・・・精霊王だしな・・・」

「なるほどね・・・魔法か・・・」

『翻訳語指定精霊語』精霊語を読めるように魔法をかけ、布を見てみると・・・

読めてしまった・・・

「たしかに、ウインの言ったとおりだ・・・」

「うー。私もみたいです・・・」

いじけるルナ・・・

「ルナ。私と契約しているから、私がいいといった魔法は使えるようにしてあるよ？」

「ほえ？そうなんですか？知りませんでしたあ」

では早速と・・・言いながら私が使った魔法をかけたルナ

「おお！本当です！見えるようになりました！」

「良かったね」

うれしそうに笑うルナの姿に私もうれしくなり一緒にあって笑う・・・

精霊様・・・水龍に会います

小説本文 「でも、この意味って何だろう？」

「我に会いたければ・・・自分の力を示せ・・・

すべての生命の中に含まれる聖なるものを・・・我に示せ・・・
・・・生命の中に含まれる聖なるものってなんでしょーうね？」

「生命・・・全ての生きている者の中にあるもの・・・」

「んー、なんだろう？・・・爪？いやでも魚にはないし・・・

血液？・・・あぁ血液か・・・魚にもあるし私たちにもある・・・」

「じゃあ一回やってみて・・・」

武器・・・ナイフを取り出し指を軽く切って岩に血をかける

・・・しかし何も変化はない

「んー違うか・・・」

「でも、近いと思います。血に水分が含まれていますから」

「そうだな・・・たぶん地に関連していると思うよ・・・違う方法で再現してみれば？」

がっかりとしている私に慰めの言葉をかけるルナとウィン・・・

「たとえば？」

「・・・水をかける・・・または水の魔力を岩に流してみるとか」

水ね・・・水はないから魔水でもいいかな・・・

魔水を取り出しかけてみる・・・が変化は何もない・・・

水じゃない・・・なら・・・

「魔力か？」

手の方に魔力を集めつつ魔力に水の属性をなじませる・・・
魔術が使えないだけで放出はできる・・・

「魔力の放出っ」と

手から魔力を出し岩に魔力がつくように近づける

・・・ゴゴゴ・・・ゴゴ・・・ゴゴゴゴ・・・

と大きな音を立てながら、くずれていく大きな岩・・・

時々、ゴロゴロと岩のかげらと思わしき石が私の足元に転がってくる
大きいのも転がってきたので当たったら危ないということ

『保護の領域』という魔法で結界をかける

『保護の領域』はその領域の中にいる場合は完全とはい切り切れない
が、

ぶつかってくる岩を防ぐことはできる

転がってきても結界に当たり砕け散る・・・

「さて・・・もういいかな？」

岩が完璧に崩れた後に残ったのは・・・

地下につながると思わしき階段・・・

どこまで続いているかわからないほど薄暗く、夜かと感じさせてしま
う。

「行こうか・・・ウイン、ルナ」

ルナを抱きかかえ、ウインが私の肩に乗る

「しかし何にもない・・・それに暗い・・・」

『点灯』明りが歩くと同時に動き出す・・・

歩いたらその分だけ光も動くから便利だ・・・

ランプが自分についてくると表現したらいいのだろうか・・
光が明るく照らし、暗かった地下が私たちの近くだけ明るくなった。
しかし、それより先は、道がわからない・・・

500歩ぐらい歩いただろうか・・・

奥から水が流れるような音が聞こえてくる・・

川が流れているんだろうか・・

「分かれ道？」

2つに分かれてる分かれ道・・

「どっちに行く？」

「どっちに行ったら一緒にだけど・・・選んだ道が違いかもしれないね・・・」

「んーなら二手に分かれましょう！」

「そうだな・・・。なら、手の向きだな。グーとパーで・・・」

「じゃあ行くよ！・・・グーとパーで分かれましょう！」

私が出したのはグー、ウインもグー。ルナはパーだ・・・

ルナは右、私とウインは左の道に行くことになった

「ルナ・・・一人で大丈夫？」

「大丈夫です！任せてください！」

「何かあったら叫んでね？」

ルナが立ち去ったのを見届けてから、私はウインとともにルナとは別の道を進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315v/>

精霊王と魔王様

2011年11月16日02時59分発行